

十字架のことばに人は躓く

ヨハネ福音書6:60-65

【新改訳2017】

- 6:60 これを聞いて、弟子たちのうちの多くの者が言った。「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか。」
- 6:61 しかしイエスは、弟子たちがこの話について、小声で文句を言っているのを知って、彼らに言われた。「わたしの話があなたがたをつまずかせるのか。
- 6:62 それなら、人の子がかつていたところ^{のほ}に上るのを見たら、どうなるのか。
- 6:63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。
- 6:64 けれども、あなたがたの中に信じない者たちがいます。」信じない者たちがだれか、ご自分を裏切る者がだれか、イエスは初めから知っておられたのである。
- 6:65 そしてイエスは言われた。「ですから、わたしはあなたがたに、『父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 「弟子たちのうちの多くの者」は、どういうことにつまずいているのですか。
- (2) 63節の「主が話したことばは、霊であり、またいのちです」とはどういう意味ですか。
- (3) 65節の「父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもとに来ることはできない」とはどういう意味ですか。

【解 説】

(1) 肩書きだけのキリスト信者

主が十字架で贖いの死を遂げる1年前のことである。この頃には、12弟子のほか、主イエスには「多くの弟子たち」がいた。主に従い、主の教えを受け入れたと自認する者は、だれでも弟子ということになっていた。しかし、主の弟子という肩書きはあっても、そのすべてが真に信じる者であったわけではなかった。

今日も、教会に来ている人がみな生まれ変わったキリスト者であるとは限らない。自分は洗礼を受けたからキリスト者だと思っている人の中にも、実に生まれ変わっていない人もいる。

そういう人でも日曜日毎に礼拝に来て、献金をささげ、他の人を教会に連れて来ることもある。だれが見てもキリスト者だと思われる人がいる。しかし、その人が生まれ変わった本当のキリスト者であるかどうかは、何か事が起こった時、それに対してどのような反応を示すかによって分かる。

今日の個所では、主が霊的なことについて語られると、弟子と呼ばれていた多くの者が、それを理解することができず、躓いてしまった。彼らは言った。「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか」

それは、今日も同じである。耳障りのよい、心地よい話をしている間は、多くの者が喜んで集まって来ていても、一旦、罪とか裁きについて話し始めると、怒って去って行ってしまふ。

当たり障りのないことを話しているうちはいいが、あなたが罪人であり、そのあなたの罪のためにキリストは十字架で死なれたのだと言うと、そっぽを向いてしまふ。

「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。…ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。

ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです」(Iコリント1:18, 22-24)。

(2) 十字架の言葉は霊的真理

「わたしの話があなたがたをつまずかせるのか。

それなら、人の子がかつていたところ^{のほ}に上るのを見たら、どうなるのか」(61-62節)

「わたしの話」とは、主が「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません」と言われたことである。それはキリストの十字架上の死が自分の罪の身代わりであると信じることを指している。十字架上で私たちの罪の身代わりの贖いを成し遂げてくださったキリストを信じる時、いのちが与えられるということである。

このことが受け入れられないのなら、キリストが十字架上で死なれた後、三日目によみがえり、天^{のほ}に上るのを見たら、彼らはどうなるのか。

この文章については、原文では、「どうなるのか」という言葉はない。「それなら、人の子がかつていたところ^{のほ}に上るのを見たら…」で切れている。

Joh 6:62 ἐὰν οὖν θεωρήτε τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου ἀναβαίνοντα ὅπου ἦν τὸ πρότερον;
【行間訳】 what if then you were to see the Son of Man ascending to where he was (the) before?

【NKJV】 Joh 6:62 "What then if you should see the Son of Man ascend where He was before?"

【新共同訳】 Joh 6:62 それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。

そのために、この文章については、二通りの解釈が行われてきた。「…見たら、」もっとひどい躓きが起こるだろうという解釈と、もう一つはこれと全く反対の解釈で、「…見たら、」躓きも解けるだろうというものである。このどちらの解釈を取るにしても、それは、それに続いて語られた63節の主の御言葉を見れば、明らかである。

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。

わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです」(63節)

主が、「人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません」とか、「わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです」と言っておられることは、決して主の肉を食べたり、血を飲んだりすることなのではないことを指摘しておられる。

ここで語られた主のことばは、「十字架上で私たちの罪の身代わりとして死なれたキリスト」を表している。十字架抜きでキリストを、ただ私たちの模範として信じるのではなく、十字架上で身代わりの贖いをしてくださった救い主として信じる時、いのちが与えられることを教えておられる。

①いのちを与えるのは御霊です

主は、「いのちを与えるのは御霊です」(63節a)と言われる。これによって、主は、人間の魂の中に霊的ないのちを造り出される特別な方は聖霊である、と言っておられる。聖霊の働きによって、霊的ないのちはまず与えられ、その後、維持され、保ち続けられる。いくら人の肉を食べ、血を飲んでも、そんなものは人にいのちを与えはしない。御霊がいのちを与えてくださるのだ。

②肉は何の益ももたらしません

主は、「肉は何の益ももたらしません」(63節b)と言われる。これは、文字通りに食べるのであれば、ご自身の肉も、その他のどんな肉も、魂に益をもたらすことはできない、ということである。

霊的な恩恵は、口を通して得られるものではなく、心を通して得られるものである。魂は物質的なものではない。それで、物質的な食物によって養われることはできない。

多くの人の心には、外側の見えるものや、宗教の「行う」面を、過度に重視する傾向がある。その人々は、キリスト教の総体と実質が、洗礼と主の晩餐、公式な儀式と形式、目や耳や身体的な刺激に訴えるものにある、と考える。

神のご目的が豊かに達成されるのは、人々の前でにぎにぎしくなされる見せびらかしによってではなく、静かに心に働きかけられる聖霊のひそかな働きによってである。

③わたしが話したことばは、霊であり、またいのちです (63節c)

これは、聖霊によって心に適用される主のことばと教えは、霊的な感化を生み出し霊的ないのちを伝えるまことの手段である、ということの意味する。ことばによって、考えが生み出され、刺激される。ことばによって、心と良心は呼び覚まされる。そして、特にキリストのことばは、霊を呼び覚まし、いのちを与えるものである。

(3) 主の忍耐

けれども、あなたがたの中に信じない者たちがいます。」信じない者たちがだれか、ご自分を裏切る者がだれか、イエスは初めから知っておられたのである (64節)

主は、神であられたから、初めからすべてのことを知っておられた。主は、ユダがご自分を裏切ろうとしている者であることを知っていながら、ご自分の近くにいることを許しておられた。けれども、「ご自分の前に置かれた喜びのゆえに」(ヘブル12:2)、そのすべてを耐え忍ばれたのである。

(4) 私たちの信仰と救いの確かさ

そしてイエスは言われた。「ですから、わたしはあなたがたに、『父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのです。」(65節)

ここで、私たちが信仰を持つことができるのは、天の父なる神によるのだということを教えられる。そこにまた、私たちの信仰と救いの確かさがある。主はその確かさを、また次のように私たちに約束しておられる。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。

彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。

わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。

だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。」(ヨハネ10:28-29)